

マクロ経済学へのいざない

私たちが「日本経済の状態」を客観的に判断したいとき、その手がかりを与えるのが、GDP(国内総生産)、経済成長率、消費、投資、失業率、物価水準やマネーサプライといった主要な経済指標(マクロ経済変数)です。私の担当するマクロ経済学は、経済変数の動きを観察し、変数同士の因果関係を理論(モデル)化して、それをもとに経済情勢の判断や経済政策の効果を分析する学問です。ミクロ経済学とマクロ経済学は経済理論の2大支柱であり、通常、大学の経済学部のカリキュラムでは、これらの理論学習が経済学学習の中核(コア)とされます。なお、理論の現実的な妥当性をデータに照らして統計的に検証する手続きを与えるのが、計量経済学という分野で、経済学部のカリキュラムではやはり重要な基礎科目に位置づけられます。

- 貨幣経済論
- 基礎マクロ経済学
- 応用マクロ経済学

中野 正裕 (なかの まさひろ)



1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。
[URL] <http://www1.tcue.ac.jp/home1/mnakano/index.html>

私が大学に入学したのはバブル期のピークである1989年でした。それから10年あまりで、当時4%近くあった経済成長率は1%程度にまで落ち込み、失業率は2%台から5%近くまで上昇し、政府の債務残高は400兆円近く増加しました。この期間は「失われた10年」ともよばれ、国内産業の競争力や経済政策に対する信頼が大きく揺らぎました。また、2002年から近年までの景気回復期を経ても家計消費は伸び悩んでいます。それは少子高齢化

にとまう年金不安や若年者間の所得格差の拡大、将来物価に関する不確実性の増大といった諸要因により日本経済の将来的な発展が展望できないことの現れかもしれません。経済学部の皆さんにはマクロ経済学の学習を通じて、生きて動く経済(ongoing economy)の見方を養い、将来に向けて適切な判断が下せる経済人になってほしいと思います。

マクロ経済学を学ばさい、「優良な教科書を2、3冊読み、あとは新聞やインターネットなどの経済記事に定期的に目を通す」のが王道ですが、まずは講義を活用し、マクロ経済学の基礎概念を理解しましょう。さらに進んだ学習を行う場合、中級テキストとしてO.プランシャル『マクロ経済学』(上・下)東洋経済新報社を薦めます。また、浅子和美・篠原総一(編)『入門・日本経済』(第3版)有斐閣を、日本経済の現状分析に有益な入門書として、挙げておきます。